

野市あそび

第29号

発行 あきる野市教育委員会 東京都あきる野市三宮350 電話 042-558-1111 FAX 042-558-1560

明治150年記念 明治期にあきる野に伝えられた祭り囃子

— 神田流祭り囃子と重松流祭り囃子等の各地区への伝承 —

溝口重郎

(あきる野市文化財保護審議会委員)

はじめに

遠くから聞こえてくる祭り囃子の笛や太鼓の音に誘われて、「あっ、山車がやって来たな!」と思いながら急いで通りへ駆けつけた思い出が、皆さんにもあることと思います。

あきる野市内には、数多くの祭り囃子の保存団体があり、今も地域の祭りや市のイベントで活躍しています。これらの祭り囃子は、明治期にあきる野市内に伝えられ、神田流祭り囃子と重松流祭り囃子の2つの流派が中心になり、各地で継承されています。これらのお囃子の伝承の流れについて眺めると共に明治から100年以上もこの地で今なお継承され続けている市内の祭り囃子の系譜について見てみたいと思います。

1 神田流祭り囃子の市内の伝承について

江戸の祭り囃子は、現在の葛飾区東金町のある葛西神社(かつての香取大明神)が、発祥の地と言われています。宮司の能勢環が、享保年間(1716~35)に神を敬う和歌にあわせて、太鼓の旋律を創作したのが葛西囃子の始まりと言われています。後に葛西から神田、深川、目黒、船橋さらに阿佐ヶ谷方面に伝播していきました。神田に伝えられると、優秀な門弟達の中で改良され、独自の神田流として発展するようになりました。

西多摩地方への伝播については、慶応2(1866)年に黒沢村小枕(現青梅市)に生れた若林仙十郎(本名・仙太郎)が業績を残しています。仙十郎は、生来芸事が好きで東京に出て本格的に江戸歌舞伎を習い、さらに神田囃子や神楽、地芝居などを学んで、



留原・八坂神社祭礼

やがて郷里に帰り、万作芝居一座を結成して活動することになります。

黒沢地区では仙十郎の囃子の弟子に、柳川長吉(ちやうきち)がいました。長吉は嘉永6(1853)年生まれで、行商人として各地に出向いていました。

【引田地区】

あきる野に神田囃子が伝えられた経緯についてこのような話が残されています。「明治の初めの頃まで引田村では、一か月ぐらい田植えの時期が早い江戸川や多摩川の下流域の農家に、馬を貸し出し収入の一つにしていたそうです。後日馬を引き取りに葛西や六郷に行き、一晚農家に泊まりご馳走になりながら、遠音に聞こえる祭囃子に心を引かれ、この囃子を是非とも学びたいと尋ねたところ、すでに黒沢地区に教えている。」とのことでした。

このため引田地区では、明治10(1877)年頃に、仙十郎の弟子の柳川長吉から神田囃子を教えてもらいました。演奏曲目は、打ち込み、昇殿、屋台、鎌倉、仁羽、神田丸、大切り等でした。

柳川長吉はその後神奈川県緑区とやの鳥屋で村の娘と結婚し、緑区中沢地区に転居して囃子を教えていましたが、明治30(1897)年9月に病気のためその生涯を閉じました。

【留原・落合・星竹・本郷地区】

引田地区に定着した神田囃子は明治20(1887)年とほらに留原地区に、さらに明治20年代には落合地区に伝えられました。

留原に定着した

神田囃子は、約80年の歳月をかけて五日市地域の様々な団体に伝えられています。留原地区から明治42(1909)年には星竹地区ほしだけの星竹囃子連に伝え、星竹囃子連から昭和21(1946)年には戸倉の本郷囃子連に神田囃子を伝えています。

【栄町・小中野・下町地区】

大正6(1917)年には「番場子供囃子」(現栄町囃子連)に、留原出身の市倉熊次郎が神田囃子の手ほどきしたのが、栄町囃子連設立のきっかけであったとも伝えられています。

栄町囃子連は昭和27(1952)年11月、小中野囃子保存会に、平成8(1996)年には下町はやし連に神田囃子を伝えています。

【上町・三内・小和田地区】

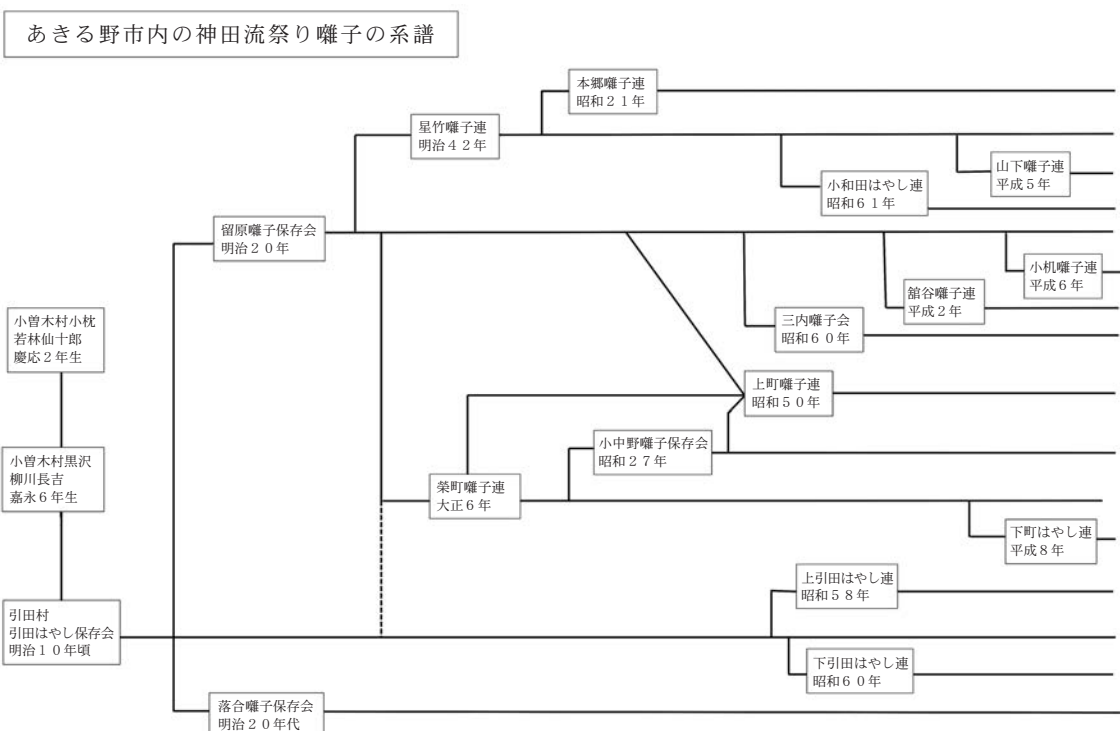
留原囃子保存会は、昭和50(1975)年には五日市の上町囃子連に、昭和60(1985)年に三内囃子会に、翌61年には小和田はやし連に神田囃子を伝えています。

【館谷・山下・小机地区】

さらに、平成2(1990)年12月にはたてや館谷地区の館谷囃子連に、平成5年には山下はやし連に、翌6年には小机囃子連に神田囃子を伝えています。

【上引田・下引田地区】

はじめて神田囃子が伝えられた引田はやし保存会では、昭和58(1983)年に上引田はやし連に、昭和60(1985)年には、下引田囃子連に神田囃子を伝えています。



※この系譜は、各地域の有識者の聞き書きを元に作成しています

柳川長吉は引田地区に明治10年頃、神田囃子を伝えましたが、「古囃子」という曲目を伝えなかったために、昭和63(1988)年上町囃子連(現五日市上町囃子連)が先駆けとなって、青梅市の黒沢囃子保存会から直接教えを受けています。

平成2(1990)年には留原囃子保存会が、同5年には栄町囃子連も、黒沢囃子保存会から「古囃子」の教えを受けています。

2 重松流祭り囃子の市内への伝承について

幕末から明治の初期にかけて、神田系の江戸囃子を改良して、斬新で複雑な新しい演奏形態の新囃子がいくつも編み出されました。その一つに、古谷重松という人物が創作した囃子があります。この囃子は、誰言うともなく重松囃子と言われるようになりました。

古谷重松は文政13(1830)年3月17日埼玉県所沢市上ノ宿に、古谷平兵衛の3男として生を受け、生家のコンニャク屋で兄を助けて働いていましたが、生来囃子が好きで各地に出向き、いろいろな囃子の修行をしていました。

後に麴屋を営む古谷源右衛門の養子となり、味噌麴の製造と染料の藍玉あゐを手広く商っていました。

重松が創り出した重松流祭り囃子は、付け太鼓(小太鼓)を「地」と「絡み」と称して、独自の音程に高音と低音に区別して調整し、相互の掛け合いで調子よくたたき、相手のたたき方を即興的に見抜

いて変奏していく「チラシ」技法も含めた、テンポの良さと力強さに満ちた演奏形式に仕上げました。

その演奏形式は、当時の若者達から絶大な人気を得ました。さらに古谷重松は、積極的に町や村に出稽古の出張をするという方式をとったために、伝承地を次から次と拡大して行きました。

やがてコンニャクの行商や藍染めの原料となる櫛の灰を求めて、江戸末期から明治10年代にかけて隣町の日の出町下平井にやってきた時に、地元の若者達に請われて重松囃子を教えることになりました。

【伊奈地区】

その評判を聞きつけた伊奈村の若者達は、夜ごとに知り合いをつてに駆けつけ囃子を習いました。

伊奈村の宮本地区では、田島角次郎、宮野亀吉、田島良七達が、さらに伊奈上宿では永井宗太郎が、伊奈新宿では加藤孫太郎、加藤健次郎、加藤武吉、田島徳次郎、在原善次郎達が出掛けて行って囃子を習ったと伝えられています。また、このメンバーの中には、古谷重松師匠から直接手ほどきを受けた者もあったと伝えられています。また、平井村（現日の出町）の重松の直伝者と言われる青年達の手ほどきも受けて、明治19年、伊奈村の3地区に、重松囃子が定着することになりました。

【二宮地区】

二宮地区では、江戸末期頃古谷重松が牛浜村（現福生市）にやって来た時に、若者達が出掛けて行って重松囃子を習ったという言い伝えや、明治7（1874）年以降に、福生村の糸屋（機織り場か）に出掛けて囃子を習得したといわれています。

残念ながら二宮地区では直接手ほどきを受けた者の名前は伝えられていません。しかし文久元年（1861）生まれの「ヒョットコの浅さん」と称された竹中浅五郎や、オカメの名人と言われた田倉鶴吉、さらに河野豊七、小澤吉五郎、岡部常吉な

ど多彩な人物がいたことは語り伝えられています。

【野辺地区】

野辺地区では、明治10年（1877）頃牛浜村から習ったと傳承されています。牛浜は交通の要衝で商人が寝泊まりをする宿や牛浜の渡しもありました。

【雨間地区】

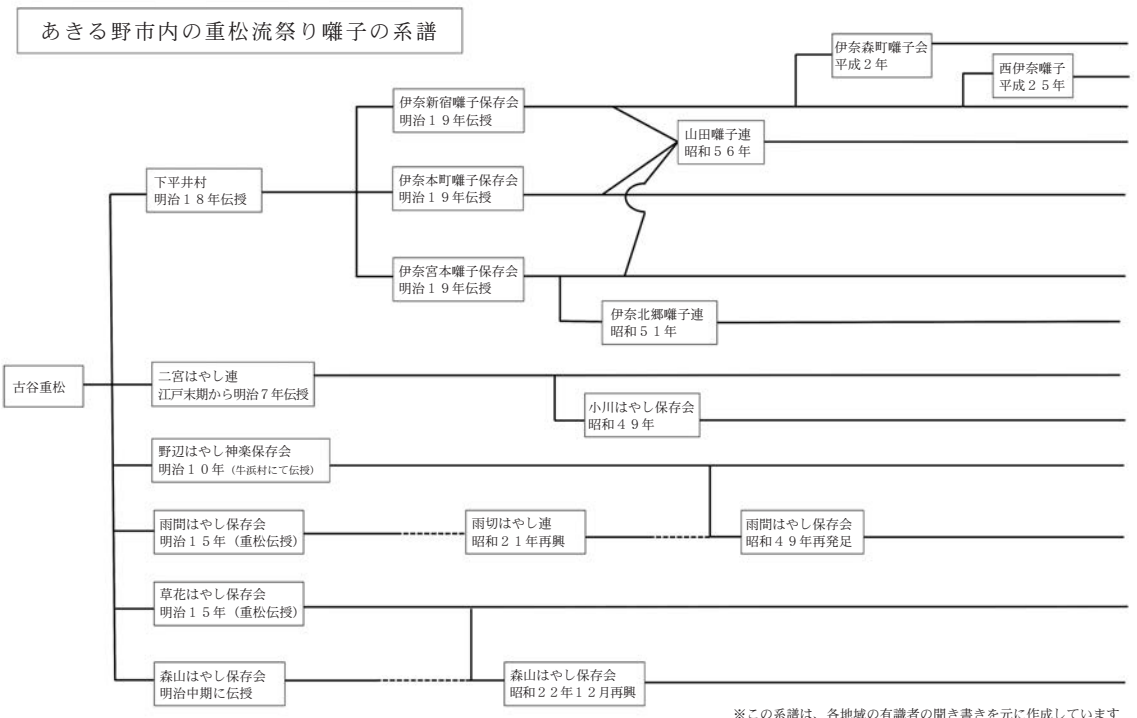
雨間地区では、江戸時代の宝暦元年（1751）に深川囃子が伝えられたとのことですが、明治の後半には絶えてしまいました。かわって明治15年（1882）からは新たに重松囃子が重松師匠から直接手ほどきを受けたと伝えられています。重松が行商をしながら秋川谷までやって来たことが推察されます。

【草花地区】

草花地区では、明治15年に福生村の糸屋に通い、重松囃子を若者達が直接習ったと伝えられています。このことから、明治初期から10年代にかけて度々



伊奈・正一位岩走神社祭礼（伊奈新宿の囃子）



古谷重松が来訪して、昼間はコンニャクや榊の灰などの商いをして、夜ごとに糸屋の稽古場等で重松囃子を教えていたことが想定されます。

【森山地区】

草花の森山地区でも、明治中期に重松流祭り囃子が伝授されたと伝えられています。

このように旧秋川市の各地区では、当時の重松流祭り囃子の伝承を伝える資料は発見されず、稽古の仕方は口伝で演奏曲目や付け太鼓等のたたき方、鉦の摺り方、踊り等は先輩から後輩へと一つ一つ教えられて、継承されていることがわかります。

3 油平神田くずしと尾崎の深川くずし半間流

【油平地区】

重松流や神田流の祭囃子の他に、油平地区では明治初期（明治7年頃）に平井村谷の^{あぶらだい}入（現日の出町）から^{つば}笛の名人で常さんという方が^{いり}養子に来ていて、この方の指導で油平の囃子が出来上がったといわれています。その後、大正元（1912）年頃には、中村幸吉、戸沼栄太郎、戸田喜近、瀬沼松太郎などが活躍し、その後中村文太郎、中村知一などが盛り上げましたが、その後だんだん後継者がいなくなってしまう、大正11（1922）年8月に、再び谷の入から^{にし}笛の師匠西国三郎、小林行雄を迎えて、油平はやしを復活させました。

祭り囃子の調査を行っていた小倉満治さん（日の出町）によると、「元は油平から谷の入が習い、やがて谷の入から油平へと囃子を帰したのです」とのことでした。このことから油平が神田くずしの本拠地であったことがわかりました。

太平洋戦争後の昭和21（1946）年5月頃には、熱心に後継者育成が行われ、活動が活発になりました。さらに昭和48（1973）年1月には新たに囃子連を結成して現在に至っています。

【尾崎地区】

尾崎地区では、深川くずし^{はんまりゅう}半間流という流派で、神田囃子のくずしとも言われています。明治10年代から20年頃（1877～1888）、高根村^{たかねむら}（現瑞穂町）へ村の若者達、坂本銀蔵、長塚権次郎、平井丑三、前田悦太郎、前田亀太郎達が出向いて、寝泊まりをして、囃子を覚えてきたとのこと。その後も小沢益蔵や他に4名の若者達が指導を受け、明治後半から大正初期の頃が全盛期であったと言われています。大正前期以降に中断してしまい、再び昭和初期

に青年団の活動が活発化して、囃子の活動が復活しました。太平洋戦争以降は、小沢智、金子三好、長塚信重、小山勝治などの尽力によって、再び復活して伝統ある囃子が尾崎地区に鳴り響いています。

4 結び

明治期に、あきる野市内各地区に伝承された祭り囃子は、戦争などの幾多の社会的変動を乗り越えて地域の人たちに今も受け継がれ、地域の祭礼には欠かせない存在となっています。ここで取り上げた伝統芸能は、お囃子に限定したものですが、市内には獅子舞、棒使い、神楽など様々な伝統芸能が受け継がれています。

これらの保存団体は、現在ではあきる野市郷土芸能連合会（お囃子・獅子舞等の伝統芸能を継承する39団体中お囃子29団体）を組織して、年間を通して活発に活動しています。

伝統芸能に限りませんが、少子高齢化の波は各団体の継承に大きな問題となっています。とは言え、100年以上続くお囃子はこれまでに多くの困難を乗り越えてきた経験があり、今後も未来を見据えて継承をつづけてほしいものです。

最後に、今年明治150年の記念にあたり、あきる野市内に明治期から継承されているお囃子の系譜を概観してきましたが、ぜひ身近にある伝統芸能の魅力を感じていただくためにも、各地の祭りに足を運び、応援していただくことを切に望みます。

【参考文献】

- ①『秋川市の文化財（第一集から第七集合冊版）』 昭和49年
 - ②『重松流祭囃子沿革史』重松流祭囃子保存会 昭和53年
 - ③『郷のにぎわい』 設立10周年誌 あきる野市郷土芸能連合会 平成18年9月
 - ④『秋川のまつり』 東京都立秋川高等学校 図書官報増刊
 - ⑤『秋川市史』 昭和58年
 - ⑥『東京都の民俗芸能』 東京都教育委員会 平成24年
 - ⑦『江戸東京の民俗芸能』 中村 規
- ※ その他各地区有識者よりの聞き書き
※ 「八坂神社祭礼」写真提供 青木豊さん